

## [ 試験紹介 ]

# 遺伝子解析のためのイチゴ炭疽病耐病性 遺伝子集積系統の作出

イチゴ炭疽病は育苗期（6～9月）に発生し、発病株が枯死に至ることからいちご栽培における最重要病害に位置づけられています。近年の気候変動に伴う夏季の高温は炭疽病の発生を助長する可能性があり、生産者は定期的な農薬散布などの予防対策に多大な労力を費やしています。

このような状況を踏まえ、当センターでは炭疽病耐病性を育種目標の一つとしており、その一環として、炭疽病耐病性遺伝子を集積した系統の作出を進めています。炭疽病耐病性には複数の遺伝子が関与していることが知られているため、炭疽病菌の接種試験により耐病性個体を選抜し、さらにそれらの個体を交配・自殖することで、耐病性遺伝子を集積した系統の作出を目指しています。

これらの系統に対して遺伝子解析を進めることで、耐病性個体の選抜に有用な DNA マーカーを開発し、炭疽病耐病性品種の育成を加速化させることが可能となります。



写真 イチゴ実生苗に対するイチゴ炭疽病菌接種試験

(生物工学研究室)

## [ 試験紹介 ]

# イネカメムシの発生生態の解明と防除方法の検討

イネカメムシは、イネの籾を吸汁することで不稔や斑点米を引き起こし、収量の減少や品質の低下を招く重要害虫です。これらの被害を防ぐためには、本県におけるイネカメムシの発生生態を明らかにし、最適な防除対策を検討することが不可欠です。

イネカメムシは、越冬時に林縁部で多く確認されていることから、県南地域の4か所を選定し、越冬状況及び水田への移動時期・経路を調査しました（写真1）。その結果、イネカメムシは落葉の下だけでなく林縁のジャノヒゲ株内で越冬し（写真2）、また、イネの出穂期前にはメヒシバやセイバンモロコシ、未出穂の水田に移動することが分かりました。さらに、粒剤や箱粒剤などの農薬を用いた試験も行い、効果的な薬剤や防除のタイミングについて検証を進めており、現在その結果を解析中です。

今後は、ジャノヒゲにおけるイネカメムシの動態調査を継続するとともに、農薬による防除試験をさらに進めることで、発生予察の精度向上や、より効果的な防除方法の確立を目指していきます。



写真1 水田内での調査の様子



写真2  
ジャノヒゲで越冬する  
イネカメムシ

(病理昆虫研究室)